

アートセラピーにおける「中心性」の考察

甲子園大学大学院人間文化学研究科 山本 真理子

概 要

心理療法は殆どが言語を媒体にして行われるものが多い。しかし、アートセラピーは言語では表現されない心の内面を非言語による媒体を用いることで問題解決を図る心理療法である。本論文は、アートセラピーでは何が起きているのかという本質に迫る姿勢に基づき、「中心性」のイメージという筆者独自の概念を、アートセラピーの本質的理解のための基準として、あるいは心理臨床でのより質の高い実践に適応しうる基準として用いることを考察したものである。この考察は、筆者の長年に渡る美術制作歴及び、約10年間のカウンセリングルームや施設でのアートセラピー実施中に、体験的に得られた問題意識を基にし、多次元的な視点を用いて展開された。それは、芸術の始源としての洞窟壁画から現代美術に至る歴史的視点、あるいは心理療法のルーツを辿る視点、ユング心理学に見られる「マンダラ」や「心的エネルギー」論の心理学理論を巡る視点等からの考察である。その考察を通し、「中心性」のイメージの臨床上の重要性を指摘し、展望したものである。

第1章では、アートセラピーに存在する問題点について議論し、アートセラピー誕生の背景の一つとして考え得る Sedlmayr が指摘した中心喪失状況について述べた。

第2章では、アートセラピーについての様々な定義を挙げた上で、本研究における定義とし

て、「芸術を用い、中心のあるイメージ作用によって、自己治癒を引き出す心理療法」とする立場を明示し、アートセラピーに筆者独自の視点中心のあるイメージ作用を提示した。さらに、本研究の対象とされるアートセラピー誕生の時代背景を探り、芸術から分かれて専門性を獲得して行くまでの歴史的プロセスを振り返り、その過程から示唆された中心の喪失状態について検討した。その上で、研究の目的と方法が述べられ、その考察がアートセラピーの本質に迫るため、多次元的構成をとる事を示した。

第3章では、アートセラピーの治癒力が、芸術に元来内包されるものであるとする立場から、5人の芸術家の生涯とその描画に残されたアートセラピー的変容に着目し、それを臨床心理学の事例的に解釈し、芸術による自己治癒力について考察を行った。レオナルドは、素描に直接的なイメージを表した。例えば流水の渦巻や毛髪の渦巻表現に、原初的な渦巻の型である中心性を有した象徴的な元型イメージが見られた。表層的な癒しではなく、深層からの自己治癒になって表出されていたことがわかった。

ゴヤは後半生に、ルドンは前半生に、引き籠もりが記録されていた。ゴヤは聴覚障害と言う厳しい環境でも葛藤を描き続けた末、最晩年には描画に中心性が明らかになって来て、清浄な心の世界が描き出された。

ルドンは眼球や蜘蛛の形に円形を大きく描いており、中心を持った円が執拗に描かれていた。その事から、アートセラピーと共通する自己治癒が行われていたことがわかった。

フリーダ・カーロにとって、描画は耐え難い現実の中から、自然に求める様にして辿り着いた救済手段であったと思われる。中心に配された彼女自身の像からは、鑑賞者を惹き付けて止まない中心性のようなものが描き出されており、原始時代の洞窟壁画に表現されている動物達

が有していた何らかの中心性のようなものと類似していた。

ポロックは、イメージ作用に基づかない作風の中心喪失した制作を続けた結果、彼自身の心の軸が失われ、中心喪失状態になったと推測される。描画の様式が変化したために中心性が獲得されず、描画における中心を有したイメージ要素の否定は、人間の本性に反するものであると考えられた。

5人の画家のそれぞれの生涯と作品を分析し、対比することによって、アートセラピーの要素が行われている事が想定された。芸術家の制作の中に表れた中心の様な視覚要素も見出され、その考察のプロセスで、描画に表現された中心性と自己治癒との関係が示唆された。その自己治癒が成された事から、「中心性」をアートセラピーの本質と関連したものとして定義付けた。

第4章では、心理療法のルーツとされる呪術におけるアートセラピー要素が歴史的側面から考察された。呪術と言語による心理療法の関係と、呪術と非言語によるアートセラピーの関係が比較され、考察を進める中で、「中心性」がアートセラピーの要素として浮上した。

第5章では、視覚における認知プロセスに先行するイメージに着目し、イメージの定義を確認した上で、中心性を示すイメージがどの様に理論付けられるかを、Jung 心理学のエネルギー論から考察された。また、Jung によって取り上げられたマンダラが、造形的分析の視点から再検討された。そして、アートセラピーにおける中心性のイメージの表出が、治癒に関係すると、類推的に考察した。

第6章では、筆者がカウンセリングルームや施設等で行ったアートセラピーの体験から、5事例が考察された。摂食障害のアートセラピー事例では、クライアントの内的エネルギーの高まりが集合して中心性を形成する過程が描画で示され、自己治癒に至ったと考察した。知的・

身体障害者のアートセラピーでは、正方形の紙に太陽のテーマを描くと言う枠組を設定したテーマで、結果的にエネルギーが中心軸を成しながら集中し中心性が表れ出した時に、アートセラピーの効果が明確に観察された。場面緘黙傾向の児童のアートセラピーでは、性格や発達速度の要素などの個人差が微妙に絡み合う様子が中心性の強弱を含む描画に表現されたが、総じて中心は心の成長変化に伴って観察された。寛解期の統合失調症デイケアのアートセラピーでは、粘土の桜の木に芯を入れて立たせる事から、バランスが取られ中心性が獲得されるに従って、安定した心の状態が得られたと観察された。作品に中心性が示される事とアートセラピー効果が関連していると考察した。高齢者のアートセラピーでは、粘度を高くした絵の具を握ねて丸く渦のように回す身体行動の軌跡としての中心性が表現された。高齢者の深い心の層から中心軸を回る様に浮上したものが表現されたと推測した。

第7章では、それまでの考察を踏まえた総合考察を行った。アートセラピー全体を円環的に6つの方向からの多次元構造で考察を進めた結果、イメージする力を背景にした「中心性」が重要な鍵概念となる事が集約的に明らかとなった。即ち、描画にイメージの力が働いた結果、中心が取り戻されることが治療に必要であり、それが心の統合を取り戻すことに繋がるアートセラピーの主要素であることが導きだされた包括的考察となった。即ち、アートセラピーの本質的な重要要素は、イメージ活動が心的エネルギーに伴って、中心に向かって集中すること、即ち「中心性」があることであると結論付けた。臨床心理学的には、「中心性」が軸となったアートセラピーは心の健康維持に繋がる事が示唆され、表現の中に中心の感じられる度合いが、アートセラピー実施上の効果尺度に成り得ると言う考察で締めくくり、論考を終えた。